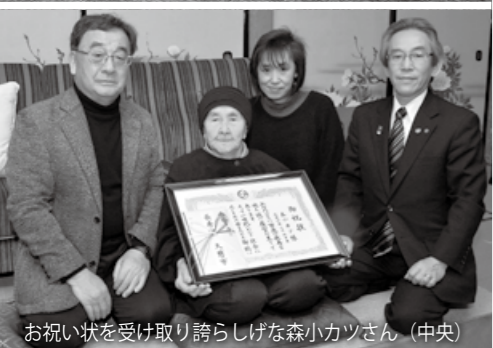


あっぱれ! 100歳
ご長寿おめでとうございます



お祝い状を受け取り誇らしげな森小カツさん（中央）

森小カツさん（長内町）

病気知らずで長寿

2月6日、森小カツさん（長内町）が100歳の誕生日を迎え、自宅で行われた長寿祝いが行われました。山内隆文市長から「これからも元気でいてください」とお祝い状とお祝い金を贈られたカツさんは「ありがとうございます」と笑顔。10年以上病院にかかっているカツさんに、長男の幸一郎さんは「これからも健康で、まだまだ長生きして下さい」と一層の長寿を願いました。



山内市長（左）にはがきを手渡す大石協会長（右）

観光スポットはがき完成

小袖海岸を紹介

日本郵便東北支社は、県内の観光スポットの絵入りはがきの販売を1月23日から開始。同月27日には同社岩手県北部地区連絡会久慈支部の大石純夫支部長が市役所を訪れ、小袖海岸が印刷されたはがきを山内隆文市長に贈呈しました。はがきは簡易郵便局を除く県内の郵便局で10枚1セット700円で販売するほか、1枚70円でばら売りも行われます。

久慈地方農業振興大会が開催
品質向上 信頼の産地へ



山内隆文市長から表彰を受ける田村憲史さん

2月4日、久慈地方農業振興大会（久慈地方農業農振活性化推進協議会主催）が市内催事場で開催。農業関係者など約400人が参加しました。大会では同協議会会長の山内隆文市長が「生産者、関係機関・団体が一体となって、産地力の強化と地域活性化、さらには若者が魅力を感じる農業の確立に取り組みましょ

う」とあいさつ。平成25年の農畜産物の販売情勢報告に続き、畜産や園芸などに積極的に取り組む農業者を部門ごとに表彰しました。受賞者を代表して田村憲史さんが「受賞を励みに生産性と品質の向上に努め、より信頼される産地の確立に努めます」と謝辞を述べました。その後、大会では農業活性化を題材に講演が行われ、参加者は熱心に聞いていました。当市の久慈地方農業表彰受賞者は次のとおり（敬称略）
 【明日を拓く担い手賞】▼田村憲史（待浜町）
 【意欲ある担い手賞】▼大矢内利男（山形町）
 【次代へ伝承する「地域食文化」賞】▼川口キクエ（待浜町）
 ▼森小ヨシノ（長内町）

久慈地方乾しいたけ料理コンクールが開催
アイデア満載! シイタケ料理

【材料】（4人分）
 ○ライスコロケ…乾シイタケ4個、米2合、骨とりさんま※2尾、醤油大さじ2、酒大さじ2、小麦粉・パン粉各適量、卵1個、シイタケ戻し汁
 ○たれ…片栗粉・しょうが・かつおだし各適量、めんつゆ大さじ2、酒大さじ1、戻し汁約600cc（炊飯器分含む）、ネギ10g※サンマは久慈市漁協の「まるごとさんま」（生しょうが風味）を使用
 【作り方】
 ①乾シイタケ4個を5〜10mm角くらいの大きさにカット。さんまはレンジで2分程度加熱しておく。米、醤油、酒を釜に入れ、戻し汁をメモリまで入れ、シイタケ、さんまのせ炊飯器で炊く。
 ②炊き上がったたら丸めて、衣をつけ、180度位の油できつね色になるまで揚げる。
 ③たれを作る。戻し汁300ccにめんつゆ、しょうが、酒、かつおだしをいれ一煮立ちしたら水溶き片栗粉でとろみをつける。
 ④ライスコロケに、白髪ネギを添えてたれを盛り付ければ完成。

2月8日、久慈地方乾しいたけ料理コンクール（県北広域振興局など主催）の実演審査会と表彰式が久慈東高校で開催。地域特産の乾シイタケを使ったレシピの独創性やおいしさなどを競いました。コンクールは、肉厚で食感、味ともに優れ、全国的にも高く評価されている岩手県産の原木乾シイタケの消費拡大を目的に企画。4人分2千円以内、1時間でできるアイデア料理に応募した52人・62点の中から書類審査を通過した8人が調理を実演しました。完成した料理は3人の審査員が見た目や味などを評価した後、参加者全員で試食。審査の結果、二又壽大さん（巽町）の「JJJライスコロケ・レシピ」が最優秀賞作品のレシピは左記のとおり。手軽でおいしいシイタケ料理を皆さんも作ってみませんか。



見た目もおもしろい二又さんの作品

緊急時の物資輸送などでヤマト運輸と協定
物流のノウハウ 災害時の支援に



調印書を持つ富田主管支店長（左）と山内市長

市とヤマト運輸岩手主管支店（富田芳正主管支店長）は2月4日、「災害時における緊急物資輸送及び緊急物資拠点の運営等に関する協定」を締結。調印式には同社から6人が出席し、富田主管支店長と山内隆文市長が協定書に署名、押印しました。締結を終えた富田主管支店長は「災害発生時には私たちの持つ物流のノウハウを生かして、日ごろからお世話になっている市民の皆さんのために支援をしていきたいです」と抱負。山内隆文市長は「得意分野で援助をしていただくことは大変心強いです。」とお礼を述べました。同協定では、地震などの大規模災害が発生した時に、①防災備品や支援物資の避難所への配送②支援物資拠点の運営などで支援協力を行う内容です。同社の社員は東日本大震災が発生した直後から避難所や被災地で自発的に支援物資の管理や配送に従事しました。そのような動きを受け、同社は会社全体で組織的な支援制度を確立。その後は平成24年1月まで被災地の現地社員と、全国からの応援社員が集積所で救援物資の仕分けや避難所などへの配送を行いました。協定は、北上市、陸前高田市などに続き県内で5例目。同社では今後も他市町村との締結を進める予定です。



市内の拠点となるヤマト運輸久慈大川目センター

久慈病院でドクターヘリ用ヘリポートの運用訓練
救命率向上に期待



患者の搬送手順を確認する消防隊員ら

県立久慈病院（阿部正院長）と久慈広域連合消防本部（久慈正俊消防長）は2月4日、同病院敷地内に完成したヘリポートの運用を前に訓練を実施。医療・消防関係者約20人が参加しました。訓練は、ドクターヘリで搬送した患者を同本部久慈消防署の救急車に乗せ替え、同病院の救命救急センターまで運

ぶ想定。実際に県のドクターヘリを使い、患者の搬送手順や離着陸時の連携、ヘリポート付近の安全確保などを確認しました。ヘリによる患者輸送はこれまで、消防との共用で久慈病院から約5キロ離れた長内町平沢地区の久慈空中基地を使用していましたが、これからは従来の離着陸所に比べて搬送時間が約10〜15分短縮されます。同病院駐車場の東南端に新設されたヘリポートは、面積約310平方メートル、高さ約1.5メートルで、事業費は約1100万円。フライトドクターを務めた岩手医大高度救命救急センターの大間々真一医師は「搬送される患者の救命率の向上につながります」と強調しました。